

エンターテインメントの創造とは ～ヒットドラマの創作現場より～

2015年度関東支部総会 特別講演

脚本家 **福田 靖** 氏

ふくだ やすし 1962年山口県周南市（旧徳山市）生まれ。1985年劇団主宰。1995年ドラマ『BLACK OUT』で脚本家デビュー。その後、数々の作品の脚本を手がける。テレビドラマに、『救命病棟24時』『HERO』『海猿』『ガリレオ』、NHK大河ドラマ『龍馬伝』、『DOCTORS～最強の名医』、その他多数。『DOCTORS～最強の名医』は、2015年1月にパート3が放映された。映画に、『海猿』シリーズ、『HERO』『容疑者Xの献身』『真夏の方程式』など。2015年7月に映画『HERO』が公開。今最も売れている脚本家の一人である。



脚本家という仕事

脚本家になって今年で21年目になりますが、この仕事を通じて一番身に染みて学んだことは、「楽な仕事は一つもない」ということです。その中でも最も悩み、また最も印象的な作品となったのが、NHK大河ドラマ『龍馬伝』です。

ドラマ制作の裏側をお話する前に、まず脚本とは何か、脚本家の仕事とはどのようなものなのかということをご説明いたします。脚本は、シーンの場所や時間を設定する「柱」、人物の動作を説明する「ト書き」、人物が話す「セリフ」の三つの要素で成り立っています。登場人物のこれらの要素が複雑に重なり合って作られたものがドラマや映画です。脚本家はこの要素を様々な制約の下に書いていきます。ここに、脚本家と小説家の大きな違いがあります。小説は作家の想像力の赴くままに物語が展開されますが、脚本には、例えば大河ドラマなら45分という「尺」と呼ばれる時間の制約があります。さらに、どのような俳優、女優の方が出演されるのか、内容は予算に合っているか、俳優同士のスケジュールなど、数々の条件をクリアしながら書いていかなくてはなりません。脚本は文芸作品ではなく、いわば建物の設計図のようなものです。どんな土地にどんな建物を建てるのか、それは商業施設なのか、マンションなのか。登場人物が数百人規模となるドラマは、あたかも一つの町を作るようなものです。そして、そのドラマを作るスタッフ全員が理解できる設計図、つまり脚本を現場に届けるのが私の仕事です。私は自分自身をクリエイターというよりは、提案されたものを試行錯誤しながら一つの作品にまとめ上げていく職人に近いのではないかと考えています。



新しいヒーロー像を求めて

私が2010年NHK大河ドラマのオファーを受けたのは、2007年のことでした。実は『龍馬伝』に決まるまでには、様々な紆余曲折がありました。一番大きな問題は、坂本龍馬のドラマは、昭和43年に司馬遼太郎原作、『竜馬がゆく』としてすでに放映されていたことです。大河ドラマは通常、同じ主人公は二度取り上げないということですが、制作

スタッフの方々の後押しや、40年経っていることもあり、『竜馬がゆく』とは違う龍馬をやるならよいのではないかという流れになりました。

そこで私は、龍馬と同時代に土佐で生まれ育った岩崎弥太郎に目をつけました。実は二人の接点は、龍馬が暗殺される直前に海援隊に弥太郎が会計係として土佐藩から出向し龍馬を手伝ったという記録だけなのです。弥太郎は非常に優秀な人物でしたが、身分が低いため出世が難しい立場でした。ところが龍馬が暗殺された直後から突然豪商としてのし上がり、大実業家になってしまう。龍馬が最後に行っていた仕事は海援隊という海運業。弥太郎が始めた三菱商会も海運業です。私は、龍馬の魂が弥太郎に引き継がれ、そして三菱という形になって平成の現代に脈々と受け継がれているという壮大なストーリーが描けるのではないかというプレゼンテーションをしました。すると、それは『竜馬がゆく』にはない展開だということで、ドラマ制作に最終的なOKが出たのです。私は、日本の歴史上最も人気のあるヒーローを描けることになりました。

しかし、現地に赴き、様々な取材を重ねれば重ねるほど、新しい龍馬像を探し出すことに非常に困難を感じるようになりました。研究家の数だけ説があり、結局、本当のところは誰にもわからないのです。しかし龍馬には、『竜馬がゆく』を読んで感動し、これが龍馬だと信じて疑わないファンが大勢います。私たちは『竜馬がゆく』ではない龍馬ものを作らなくてはならない。調べれば調べるほど、もうこれは無理だと思うようになってきました。

しかし、ここで私は、小説と脚本は違うということにあらためて気づきました。平成のドラマなのだから、主演の福山雅治さんにふさわしい現代の龍馬でなければならない。そのとき私が思い出したのは、これまでいろいろな職業もののドラマを作ってきた自分の経験でした。例えば『海猿』の海上保安官も、『HERO』の検事も、『ガリレオ』の物理学者も、どのような仕事をする人々なのか私は全く知りませんでした。毎回オファーを受ける度に途方に暮れ、資料を読み、勉強し、人と会い、取材をし、自分の中に知識やエピソードを蓄積していく中で、次第にドラマが見えてきました。すばらしいアイデアが天から降ってくるなどと期待せず、とにかく地に足をつけて、もう一度自分がやろうとしている素材の勉強をし直すべきだと思ったのです。日本で出版されている坂本龍馬に関する本はすべて読み、龍馬に関するエピソードは

すべて調べたという自信が持てるほどに私は勉強しました。



「成長する主人公」としての龍馬

私は、ドラマの主人公には、大きく分けて二通りあると思っています。それは、「成長する主人公」と「成長しない主人公」です。成長しないというネガティブなものに聞こえますが、これは、「最初から完成されているキャラクター」という意味です。例えば、おなじみの『水戸黄門』の黄門様は、最初から完成された型があり、初めから立派な人です。成長する主人公の例としては、『巨人の星』。星飛雄馬という少年がだんだんと成長していき、やがてすばらしい投手になる。旅館の若女将の奮闘記といったものも成長する例です。このように見てみると、私は『龍馬がゆく』の龍馬はすでに完成されている主人公ではないかと思いました。1ページ目から非常に魅力的な人物として描かれている。それならば、自分が描く龍馬は、成長していく主人公として描けないだろうか。何者でもなかった少年が様々な経験を重ねながら成長し、皆がよく知っている坂本龍馬になっていく。自分が書くべき龍馬はそういう人物ではないだろうか。その成長の過程は、自分自身が仕事から学んだ経験とも重ね合わせることができる。さらに、福田雅治さんご自身も、今のような大スターになるまでには、いろいろな苦労を重ねられてきた。そういうすべての人たちが自分を投影できる龍馬を作ればよいのだと思ったのです。その瞬間に私の中から司馬遼太郎さんの姿がふっと消え、『龍馬がゆく』の呪縛から解放されたのです。そこで初めて、自分にも龍馬が書けるかもしれないと思いました。

『龍馬伝』に出てくる龍馬と弥太郎との関係はほとんどフィクションです。もし弥太郎が龍馬のことを幼い頃から知っていたら、どんなことが起こっただろうかと考えストーリーを組み立てました。岩崎家も坂本家も同じ下級武士の身分であるにもかかわらず、坂本家には金があったばかりに龍馬は恵まれて育ち、江戸に剣術修行に行くことができました。優秀な弥太郎はさぞ苦々しく思ったことでしょう。ここに私は、大好きな映画である『アマデウス』の天才モーツァルトと凡才サリエリの関係を重ねました。音楽の神に愛されたモーツァルトをサリエリは妬み抜きます。ところが、誰よりもモーツァルトの音楽を愛しているのもサリエリなのです。弥太郎も同じく、「龍馬はおれが最も嫌いな男だ」と言いながら、実は誰よりも龍馬を気にかけて、彼の明るさや魅力に惹かれている。『龍馬伝』というタイトルが示すように、この話は弥太郎が語る龍馬についての話なのです。



福田流エンターテインメントとは

私の仕事は、エンターテインメント、つまり娯楽を作ることです。そのための極意として、私は常に五つのことを考えています。まず一つは、「わかりやすいこと」。例えば、幕末の重要なキーワードに「攘夷」という言葉があります。これを説明するために私は、武市半平太が紙に攘夷と書いて土佐勤王党の同志たちに見せながら、「攘夷とは日本を侵略してくる異人を打ち払うことだ」と言わせました。ところがその場面を見ていない人や忘れてしまう人がいるかもしれません。そこで次の回には、岡田以蔵という男に「攘夷じゃ」と叫ばせ、ほ

かの志士たちにその意味がわかっているのかとからかわれる場面を入れ、「わかっているよ。日本を侵略してくる異人をやっつけることだ」と再度説明させるシーンを入れました。このように、視聴者がそのドラマに必要な言葉をきちんと理解できるように様々な工夫をしています。

二つ目は「笑い」。ユーモアは人の心のハードルを下げ、難しく思っていたことでも楽しみながら見て理解することができます。

三つ目は「テンポ」。今の時代、テンポよく進めていかないと、視聴者にすぐ飽きられてしまいます。そのために私は、一つのセリフに二つの意味、一つのシーンに三つの意味を込めるように作っています。攘夷の例で言うと、岡田以蔵をからかうシーンでは、以蔵と仲間たちとの関係を描くと同時に攘夷の意味を教えています。一つのシーンにいくつもの意味を込めると、視聴者にとっては45分があったという間に終わってしまい、まるで2時間の映画を見たような満足がある、そういうものができ上がるのです。

四つ目は「主役だけを立てないこと」。正義の反対は悪ではなく、正義の反対はもう一つの正義。常にどちらにも正義があるのです。両者の気持ちがよくわかるというのが、ドラマが面白くなる醍醐味だと思っています。

そして五つ目は、「新しい龍馬を作ること」。これは、これまでの歴史にどのような新しい解釈を入れるかということです。『龍馬がゆく』に出てくるエピソードを一つも使わず、すべてのシーンを新しくしていく。それが私の課題でした。

私が目指すものは、「期待を裏切らないけれども予想は裏切り続ける」ドラマです。視聴者の期待にはもちろん応えますが、そこに辿り着くまでのストーリーは、常に意表を突いた展開にする。しかし、その先には必ず納得できる結末が待っている。これが私流のエンターテインメントです。私の座右の銘に、劇作家の井上ひさしさんが言われた「むずかしいことをやさしく、やさしいことをふかく、ふかいことをおもしろく、おもしろいことをまじめに」という言葉があります。幕末という難しい主題を易しく解きほぐし、深く掘り下げて楽しいストーリーに完成させる。小学生から、おじいちゃん、おばあちゃんまで家族全員が楽しめる大河ドラマを私は目指しました。

ドラマや映画がご多忙な皆様にとってのひとときの潤いとなり、またドラマ作りのノウハウが日々のお仕事の一助になることができれば、こんなにうれしいことはありません。

